

大日本明治製糖株式会社の持続可能な開発目標（SDGs）への取り組みについて

大日本明治製糖株式会社 サステナビリティ推進室長 橘 香織

はじめに

SDGs「Sustainable Development Goals」とは、2030年の達成を目指す「持続可能な開発目標」のことです。2030年を達成年限とした「17の目標と169のターゲット」から構成されています。国家(先進国・途上国)、企業、個人などが一丸となって、環境、社会、経済の三方面から持続可能な開発を目指すもので、2015年9月の国際連合総会において全会一致で採択されました。

大日本明治製糖株式会社サステナビリティ推進室は、2018年10月に製糖業界で初めてのSDGs専門部署として発足しました。発足当初から今日に至るまでの活動についてご紹介します。

1. 発足当初から社内浸透、目標策定まで

「SDGs」「サステナビリティ」という言葉は、最近ニュースや新聞などで頻繁に取り上げられるようになりましたが、サステナビリティ推進室の発足当初である2018年10月頃は、社内はもちろん、世の中にも今のように浸透していませんでした。恥ずかしながら私も全く聞いたことがありませんでした。そこでまず、私自身が勉強をすると同時に、社員全員への説明会からスタートしました。全社員約100人を少人数のグループに分け、社内ミーティ

ングを開催し「SDGs」の理念や採択された背景などを丁寧に説明し理解を求めました。しかし、社員の反応は肯定的な意見と否定的な意見の両方があり、取りまとめの難しさを改めて感じました。当時は、環境問題の大切さは理解しているもののコスト削減や利益を重視していた節もあり、「会社として、もっと他に優先するべきことがある」「利益を出していない部署ではするべきことが無い」「世界的な情勢からもすぐにでもやるべき」「既に行っている活動がある」など社員一人ひとりの意見もさまざまに各人の認識の違いもあらわになりました。また、男女での認識の違いもみられました。「17の目標のうち、No.5“ジェンダー平等を実現しよう”はすぐにでも達成できる」との男性社員の意見に対し、「“ジェンダー平等を実現しよう”の達成が当社にとっては一番難しい」との女性社員の意見もあり、改めて考えさせられました。

そして社員全員との社内ミーティング終了後、各部署から代表メンバーを集めて「私たちのSDGsへの取り組み」を決定すべく何度も打ち合わせを重ねました。会社全体としての取り組むこと、部署ごとに取り組むべきことなど多方面からのいろいろな意見を集約し以下の通り「三つの柱と八つのゴール」を決定し、当社ホームページにて公表（2020年4月）しました（図1）。ここまでの活動に約半年間を費やしました。

以下が、～私たちのSDGsへの取り組み～になり

ます（表）。

また、「働きやすさNo.1を目指す」を掲げ、SDGsの取り組みを通じて従業員のみならず、お客

さまやすべてのステークホルダーからも選ばれる企業でありたいという願いが込められています。

図1 ホームページ掲載ポスター



表 私たちのSDGsへの取り組み

企業理念：『ばら色で豊かな食文化に貢献します』	
『食』	食を通じて“こころ”と“からだ”を豊かにします
	① 飢餓をゼロに 【SDGs No.2】
	② すべての人に健康と福祉を 【SDGs No.3】
『環境』	自然・労働・社会環境に配慮します
	③ ジェンダー平等を実現しよう 【SDGs No.5】
	④ エネルギーをみんなにそしてクリーンに 【SDGs No.7】
	⑤ 働きがいも経済成長も 【SDGs No.8】
	⑥ 気候変動に具体的な対策を 【SDGs No.13】
『地域』	地域社会の発展に貢献します
	⑦ 住み続けられるまちづくりを 【SDGs No.11】
	⑧ つくる責任つかう責任 【SDGs No.12】

2. 大日本明治製糖 SDGsへの取り組み2020

2019年4月からはSDGsを学びながら、私たちにできる取り組みを考え、小さいことから一つ一つ始めました。活動にあたり大切にしているのは、先に挙げた『食』『環境』『地域』の三つです。「食」に携わる会社として社会貢献はもちろん、「環境」や「地域」への貢献は業種を超えて必要なものであると考えています。私たちの活動の一部をご紹介します。

ます。

三つの柱の内の一つ『食～食を通じて“こころ”と“からだ”を豊かにします～』のゴールを目指す中で、女子3人制バスケットボールチーム「湘南サンズ」(現在、新型コロナ禍で活動は停止中)とのスポンサー契約を結びました。彼女たちの仕事とスポーツとの両立を目指す姿勢や、東日本大震災の被災地への継続的な訪問支援、湘南の海の清掃など社会・地域貢献活動にも非常に熱心なところに共感したのが契約に至った理由です。バスケットボールイ

ベントを通じて、子どもたちへ「食」と「スポーツ」を融合させた食育活動を行っています。そのご縁から、特定非営利活動法人国連UNHCR協会(国連難民高等弁務官事務所)を知ることとなり、当社の家庭用の砂糖を多く販売している九州地区において同商品の売上の一部を寄付させて頂く活動にもつながることができました(写真1)。こちらの寄付金は、世界中の難民支援に役立てて頂いています。また、子供たちに少しでも幸せな気持ちになってもらえたらと、北九州市内全域の子供食堂(約37カ所)へ当社の砂糖を寄贈したり、児童養護施設へ当社の砂糖を使用したお菓子やクリスマスケーキを贈る活動をしています。

また、もう一つの柱『地域～地域社会の発展に貢献します～』では、製糖業界にとって必要不可欠である「サトウキビ」と関係が深く当社のグループ会社がある沖縄県石垣島で「サトウキビ生産体験研修」を実施しています(写真2、3)。私たちの砂糖の原料となる「サトウキビ」がどのように作られ、そして地域社会とどのように結びついているのかを社員一人ひとりが実際に農作業をすべて手作業で体験することで、石垣島のサトウキビ産業への理解を深めています。その活動の詳細は、「石垣島のおいしいお砂糖日記」としてホームページで随時更新しています。



写真1 湘南サンス、国連UNHCR協会との活動

そして、三つ目の柱『環境～自然・労働・社会環境に配慮します～』では、輸送方法の見直しによるCO₂の排出量削減、業務のペーパーレス化など外部環境への取り組みや、包装資材にバイオマスプラスチックを使用し、業務用製品包装資材には水性インクを使用するなど、自然環境への負荷低減を推進しながら地球に優しい環境配慮企業を目指し取り組みを続けています。また、ワークライフバランスの充実を図るために時間単位年休制度やボランティア休暇制度を導入するなど、社員一人ひとりが働きがいを持てるよう職場環境改善にも積極的に取り組んでいます。

そして2020年度には、世界共通のゴールである



写真2 手作業で苗を植え付け



写真3 手作業で苗用サトウキビの刈り取り、脱葉、裁断

“2030年”に向けての目標をホームページにて公表し、ゴールまでの10年間を見据えた「重点目標」と、5年間での達成を目指す具体的な数値（2019年度比）を盛り込んだ「短期目標」を策定しました（図2）。短期目標では、例えば、全事務所の電気使

用量10%削減、水道使用量5%削減、ペーパーレス化推進で紙の使用量15%削減、業務の効率化による残業時間の削減や育児休暇取得率向上など、社員全員がこの目標を共有し高い意識を持って一丸となって取り組んでいます。

図2 重点目標と短期目標

大日本明治製糖 SDGsへの取組み2020

大日本明治製糖では、2018年10月にサステナビリティ推進室を新設し、“持続可能な開発目標（SDGs）”について学びながら、私たちにできることを考え少しずつ実施してきました。2018年には社内での説明会や目的共有から始め、2019年度には社内全部署で「既に行われていること」「これから取り組みたいこと」を再確認し、できることから取組をスタートしました。そして2020年度、世界共通のゴールである“2030年”に向けて、私たちは以下の目標を掲げます。ゴールまでの10年間を見据えた重点目標と、まず5年間での達成を目指す具体的な目標施策を社員全員が共有し、高い意識を持って取り組んで参ります。

テーマ	2030年に向けての重点目標	2025年度までの達成目標
食 (Foods)  食を通じて“こころ”と“からだ”を豊かにします	◇フードロス"0"を目指し 安心安全な食を提供します！	<寄付の実施> ・フードバンクや施設等への寄付を継続的に行います <フードロスの削減> ・品質保持期限を廃止します ・生産管理、品質管理、流通管理を強化し、製品・原料資材の廃棄物を20%削減します ・砂糖についての正しい知識を社会や子どもたちへ発信します ・国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)を通じて、世界の難民の子供達へ栄養強化補助食品を提供します
環境 (Environment)  自然・労働・社会環境に配慮します	◇地球環境に配慮した 事業活動を行います！	<エネルギーをみんなにそしてクリーンに> ・電気使用量を10%、水道使用量を5%削減します ・モーダルシフトや物流改善により、輸送中のCO2削減を目指します <働きがいも経済成長も> ・ワークライフバランスに配慮した誰でも働きやすい環境構築を図り、年間残業時間を20%削減します ・有給休暇消化率の向上を図り、消化率75%を実現します <気候変動に具体的な対策を> ・ペーパーレス化を推進し、紙の使用量を15%削減します
地域 (Community)  地域社会の発展に貢献します	◇地域と共に成長できる 企業を目指します！	<住み続けられるまちづくりを> ・石垣島とさとうきび産業についての情報発信や環境保全へ協力します ・事業所周辺の清掃、地域の清掃活動への参加等を通じ、地域の皆様とのコミュニケーションを図ります <つくる責任 つかう責任> ・石垣島での「さとうきび産業」を持続可能なものにする為に、「石垣島のおいしいお砂糖」を特設サイトやHPを通じて啓蒙活動を継続的に行います ・社内でのエコキャップ・ベルマーク・使用済切手の回収、寄付を実施します

(数値目標は2019年度比)

3. コロナ禍でのSDGs活動

2019年に活動を開始したものの、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響は非常に大きいものでした。コロナ禍で制約が多い中、できる範囲での活動が重要だと考えました。そして、何よりも「継続すること、持続させること」に意義があると思っています。

まず、注目したのは社員です。「働きやすさNo.1

を目指す」当社にとって、社員のみならずそのご家族の健康を守るためにも、賛否両論はありますが在宅勤務を推奨しています。当然ながら、顔を合わせる機会が減少することによるコミュニケーション不足の問題や、一人暮らしの社員などからは「寂しい」などの意見もあり、問題の解消のため部署ごとにウェブ上でのコミュニケーションを強化し、心のケアの充実を図ってきました。また、2020年10月からは「絆サポート制度」を導入しました。この制

度はコロナ禍で家族との外出や外食も難しい中で、当社が掲げる八つのゴール（図1）に絡めた行動をした社員には、会社より金銭的補助（上限あり）を行うものです。正社員だけでなく製造現場のパート従業員の方々など当社に関係するすべての方を対象としています。例えば、家族や親戚、友人とスポーツや食事をして絆を深めた場合も該当します（②すべての人に健康と福祉を⑤働きがいも経済成長も）。また、ボランティア活動なども該当します。そのような活動を通じて、社員一人ひとりがSDGsの活動につながっていることを体感してもらうことも大切だと思っています。

さらに、2020年10月より「SDGsだより」の発行を開始しました（図3）。毎月一つSDGsに関係するテーマを決めて社員に情報発信をしています。内容はさまざまで、「日本のSDGs達成度」「食品口

ス」「エコバックとプラスチックごみ」など、まさに“SDGs”なもののほか、各部署での取り組みを紹介したり、ホームページで掲げている目標の達成報告など、「SDGsを自分ごと」として捉えてもらえる環境作りに力を注いでいます。

また、直近では、在宅勤務が続く中で社員の健康管理にも注目し、運動不足やストレスを解消し、心身ともにリフレッシュして仕事もプライベートも一層充実してもらいたいと考え健康アプリを導入しました。社員に一日8000歩を目標に歩いてもらい、目標を達成すると会社が寄付を実施することになっており、楽しみながら健康になり社会貢献もできるという取り組みです。寄付先は参加者全員で決める予定です。個人やグループ（部署など）での順位が随時分かるので、予想以上にみんなで協力して頑張っており、チームワークの強化にもつながってい

図3 SDGsだより



るように感じます。

そして、当社と関係の深い石垣島では、社会福祉法人石垣市社会福祉協議会を通じて市内全域の子ども食堂や生活困窮家庭への石垣島産サトウキビ100%で出来た砂糖の配布を始めました。島内の方々に、島の産品を直接味わっていただき少しでも地域産業の発展に貢献できれば嬉しく思います（写真4）。

おわりに

初めは耳慣れない人も多かった「SDGs」という言葉は、最近では新聞やテレビなどさまざまところで頻繁に見聞きするようになりました。そして、社内でも着実に浸透しています。

これまでの活動を通じて、「砂糖」という商品は、裾野がもっとも広い基礎調味料の一つである一方で、「砂糖」単体の商品だけを通じてSDGsの活動を広めるのには限界があると感じています。また製糖業界全般に言えることとして、大もとの原料のサトウキビは、バガス(サトウキビの搾りカス)まで工場のボイラー燃料に利用するなど完全に再利用され

ているものの、粗糖（サトウキビから製造される原料糖）の精製段階では「水」「電気」「ガス」の使用を欠かすことが出来ません。日本は2050年までに温室効果ガスの排出を実質ゼロにすることを目標に掲げています。脱炭素社会の実現に向けて、私たち製糖会社は何をしなくてはならないのかを真剣に考える時が来ています。そして、その目標達成のためには流通の皆さまやお客さまのご理解とご協力、すなわちパートナーシップが重要であると考えます。SDGsの達成は、個人の力で実現できるものではありません。手を取り合うことが大切です。目標達成には高いハードルがありますが、企業として競い合うところは競い合い、連携が必要な場面は連携し合うメリハリのある活動を行っていきたくと思います。

社会環境の変化のスピードは想像以上に早く、国連が掲げる2030年までの持続可能な開発目標「SDGs」のゴールまで、いよいよ残すところ9年を切りました。私たちの事業を通じて、このかけがえのない地球にとってかけがえのない存在となるよう、これからもできること、すべきことを考え、目標に向かって前進していきます。



写真4 石垣島の美味しいお砂糖寄贈式